

# 斜里町以久科北海岸遺跡のヒグマ頭骨

佐藤孝雄

108-8345 東京都港区三田 2-15-45, 慶應義塾大学文学部

## Brown Bear Cranium Excavated from Ikushina-Kita Kaigan Site

SATO Takao

Faculty of Letters, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345, Japan. [sato@flet.keio.ac.jp](mailto:sato@flet.keio.ac.jp)

During the 2004 excavation of the Ikushina-kita Kaigan site in Sharichou, the cranium of a brown bear (*Ursus arctos*) was found in the accumulated cover soil of pit dwelling No. 3 directly beneath the Tarumae a (Ta-a) tephra layer that descended in 1739. Judging from the size of the crown portion of the canine teeth, the specimen is clearly male. Also, due to the presence of a perforation in the left parietal bone, there is a high possibility that this specimen was used in an Ainu "sending off" ritual. The discovery of this specimen is extremely significant as it supports the claim that pre-18th century Ainu utilized the holes of pit dwellings in the performance of rituals.

### はじめに

2004年度の調査に際し、斜里町以久科北海岸遺跡では、樽前 a 火山灰 (1739年降下) 層の直下に堆積した 3 号竪穴の覆土中から、1 個体分のヒグマ頭骨が検出された。当資料は、左頭頂部に一孔が穿たれており、儀礼の対象とされた個体に由来する可能性が高い。本稿では以下、同頭骨の肉眼観察所見を述べ、併せてその学術的価値も指摘しておこう。

### 頭骨の年齢と性別

発掘に当たった加藤博文氏によれば、本頭骨は検出時既に土圧で潰れた状態にあったという (加藤私信, 図 1)。筆者の元に送られてきたそれは大小 100 以上もの破片群と化してしまっていたが、慎重に接合作業を続けた結果、頭蓋骨と右下顎骨についてほぼ全貌を復元することができた (図 2・3)。

精査の結果確認された残存歯種は、上・下顎骨とも犬歯と第 4 前臼歯から最奥歯までの各歯に限られていた。いずれの歯牙も歯根端は閉塞しており、その重さから歯根内部に第二象牙質が充填されている様子が窺える。また、後臼歯は象牙質の露出範囲が咬合面の全面に及ぶまでに咬耗が進ん

でいる。さらに、頭蓋骨については各骨の癒合が進行し、縫合線の痕跡すら確認できない状態にある。歯根部セメント質に形成された年輪の顕微鏡観察に基づく正確な齢査定こそ未了であるものの、こうした外貌をもつ頭骨は満 20 歳以上に達した老獣のそれとみて間違いなからう。

遺存状況が比較的良好であった頭蓋骨と右下顎骨については、門崎 (1996) の手法に従って諸部位を計測し、その結果を表 1・2 に一覧した。表 2 に示した犬歯歯頸部 (エナメル質とセメント質の移行部) の縦幅・横幅値は、本頭蓋骨の性別を判別する上でわけても重要なデータとなる (図 3: CW・CT)。現生個体群の調査を重ねた門崎によれば、ヒグマの上顎犬歯は 99% の確率で、犬歯歯頸部横幅 13.9mm 以上を測る資料が雄、13.2mm 以下のそれが雌、また下顎犬歯の場合も 97% の確率で、同横幅が 13.6mm 以上の資料が雄、13.1mm 以下のそれが雌に属すとみてよいという (門崎 1996)。この判定基準にもとづけば、各犬歯を通じ同計測値が 16mm に達している本頭骨が雄のそれであることは疑う余地がない。表中に示された他の数値も後頭骨にみられる矢状稜の顕著な発達も、本頭骨が老成した雄に由来することを示している。



図1. ヒグマ頭骨検出状況（加藤博文氏撮影）.

### 穿孔が示唆する儀礼挙行者の具体像

注目すべきは、本頭蓋骨の左頭頂部に最大径65.2mm、最小径52.8mmを測る楕円形の孔が穿たれていた点である。こうした穿孔の存在は、本頭骨が儀礼の対象とされたものであることばかりか、それを遺した人物・集団の具体像も示唆してくれる。

周知の通り、ヒグマを山の神（キムンカムイ）の化身として崇めるアイヌは、その捕殺時“熊送り”儀礼を挙行し、神魂の坐所と目する頭蓋骨をヌササン（幣柵）に掲げる慣習を受け継いでいる。しかも、その頭骨を飾り付ける必須手順、ウンメムケに際し、彼らは雄なら左頭頂骨、雌なら右頭頂骨に一孔を穿つことを遵守してきた。そればかりか20世紀前半までに各地で挙行されていた“熊送り”には、性別の違いによって左右を区別する手順が数多存在したことも知られている（豊原1993・2004）。

民族誌の情報によれば、釧路地方のアイヌには、クマの内蔵を摘出する際、雄なら左側、雌なら右側の脇腹を裂く慣習が存在したという（犬飼・名取1940；佐藤1958）。また、沙流川流域の

二風谷や十勝伏古コタンのアイヌには、解体後いったん屋内に安置したマラット（クマの頭）に供物を捧げる際、男性ならその左側、女性なら右側に多く供えるとともに、酒杯に載せるイクパスイ（捧酒篋）の向きも雄雌で左右を違え（伊福部1965；犬飼・名取1940）、さらに、ウンメムケを終えた頭蓋骨を叉木にさし、その両端にイナウ（木幣）を結ぶおりも、雄なら左側、雌なら右側をそれぞれ他方より幾分高くする慣行が存在したようだ（伊福部1969；犬飼・名取1940）。付与された意味内容こそ不明だが、このような雄雌（男女）の違いを左右の別に反映させる行為に、“熊送り”を行うアイヌがひとしく傾注していたことは間違いない。

この点を踏まえたならば、雄の資料でありかつ左頭頂部を穿たれた本頭骨は、アイヌの手で祀られたものである可能性が極めて高いといえよう。

### 3号竪穴上層が“送り場”跡である可能性

それでは、本頭骨が検出された3号竪穴上層は、アイヌ文化期において果たして“送り場”として利用されていたのであろうか。結論からして、筆



図2. 頭蓋骨.



図3. 下顎骨.

者はその可能性が極めて高いと考える。

というのも、堅穴住居址の上層にアイヌ文化期の遺物群が検出された例は数多知られている。1739(元文4)年に降灰した樽前a(Ta-a)層、またそれと同一視される雌阿寒a1(Me-a1)層(隅田1988)の内部および直近に検出された例だけでも、標津町伊茶仁チシネ第1遺跡堅穴上層(梶田1982)、標茶町トブー遺跡1-3・8号堅穴(宇田川・豊原1984;宇田川2002)、音別町ノトロ岬遺跡1-3・6号(山本1984)、千歳市三角山D遺跡1号堅穴上層(大谷1978)などに知られており、さらに15-17世紀に遡る時期のまで含めると同様の遺構が発見された遺跡は15以上を数える。“送り場”遺跡の集成を試みた宇田川洋もこの点を重視し、アイヌ文化期の古段階には前代の堅穴住居址の窪地が好んで儀礼の場に利用されていた可能性があることを、一貫して指摘してきた(宇田川1978, 1985, 1989, 2001)。本頭骨は、この宇田川の指摘の正しさを裏付けるものともなろう。

むすび

堅穴上層を利用したアイヌ期の遺構からは、過

表1. 頭蓋骨・右下顎骨の計測値.

部位	計測項目		mm
頭蓋骨	最大頭蓋長	Greatest length of cranium: Distance frominion to prosthion.	>380.0
	基底頭蓋長	Condylbasal length: Distance from prosthion to posterior extremity of condyle.	>350.0
	口蓋長	Palatal length: Distance from prosthion to staphylion	>182.3
	吻部長	Rostal length: Distance from prosthion to orbitorale	149.0
	鼻骨長	Nasal length: Maximum length of nasalbone.	≐ 67.3
	後部頭蓋長	Post-cranial length: Distance from orbitorale to posterior extremity of condyle.	>238.0
	頭蓋最大幅	Zygomatic breadth: Greatest breadth across zygoma.	>220.0
	吻部幅	Rostral breadth: Greatest breadth of rostrum over canines.	>79.7
	口蓋幅	Palatal breadth: Palatal breadth at M1	>54.2
	M1 歯間幅	Distance between M1s contained.	>94.1
	頬骨突起幅	Supraorbital breadth: Maximum breadth across supraorbital processes.	>120.5
	脳頭蓋幅	Breadth of braincase: Greatest breadth of brain case over squamosoparietal suture.	113.7
	乳様突起幅	Mastoid breadth: Greatest breadth across mastoid processes.	174.6
	P4-M2 歯列長	Length of the cheektooth row, P4-M2, measured along the crown.	79.6
	M1-M2 歯列長	Length of the molar row, measured along the crown.	61.7
	右下顎骨	下顎高	Mandibular height
下顎体高		Mandibular body height at anteriority of P4	62.0
P4-M3 歯列長		Length of the cheektooth row, P4-M3, measured along the crown.	87.6
M1-M3 歯列長		Length of the molar row, measured along the crown.	73.4

註：P・Mの略号については前臼歯・後臼歯を意味し、後続の数値が第何歯であるかが示されている。計測はアントロポメーターとキャリパー付デジタルノギスを用い各3回行った。表にはその平均値を示してある。ただし、頭蓋骨、右下顎骨とも接合した破片群のなかには、歪みを来したそれも少なからず含まれていた。したがって、表中の各数値はあくまでも数mm程度の誤差を含む数値であると理解されたい。

去にも端野町広瀬遺跡(宇田川ら1972)やトブー遺跡(宇田川2002;佐藤2004)などでヒグマ遺体が出土した例がある。しかしながら、本頭骨のように、頭頂部が穿たれ“送り”の対象とされたことが誰の目にも明らかな資料はかつて発見されたことがなかった。そればかりか、羅臼町オタフク岩洞窟の発掘事例により、擦文文化期の終末期には既にアイヌの“獵熊送り(オプニレ)”に酷似した形式のヒグマ儀礼が行われていたことが明らかとなったにもかかわらず(西本・佐藤1991;佐藤1993),確実に19世紀以前の“熊送り”に由来するとみられるアイヌ文化期のヒグマ遺体は未だ殆ど発見されていないのが実情である。こうした状況にあつて、本頭骨が検出されたことは極めて大きな意義をもつ。北海道大学と知床博物館は、この以久科北海岸遺跡も含め、斜里町内に所在する遺跡群の調査を継続的に行う予定と聞く。その過程で更なる資料が発見されることを期待して、小稿の擱筆とする。

#### 引用文献

- 犬飼哲夫・名取武光. 1940. イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二). 北方文化研究報告3:79-135.
- 伊福部宗夫. 1969. 沙流アイヌの熊祭. 123pp. みやま書房, 札幌.
- 宇田川洋. 1978. 虹別シュワンの熊送り場. 季刊どるめん16:133-143.
- 宇田川洋. 1985. アイヌ文化期の送り場遺跡. 考古学雑誌70(4):32-78.
- 宇田川洋. 1989. イオマンテの考古学. 124pp. 東京大学出版会, 東京.
- 宇田川洋. 2001. アイヌ考古学研究・序論. 520pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 宇田川洋. 2002. トブー遺跡-2002年度調査略報-. 5pp. 東京大学大学院人文社会系研究科常呂実習施設, 常呂.
- 宇田川洋・加藤晋平・越田賢一郎. 1972. 北海道端野町のイワクテ(物送り場). 考古学ジャーナル67:13-15.
- 宇田川洋・豊原照司. 1984. トブー遺跡の発掘調査. 釧路川流域市研究会会誌・釧路川3:1-26.
- 大谷敏三(編). 1978. 千歳市文化財調査報告書III 祝梅三角山D遺跡における考古学的調

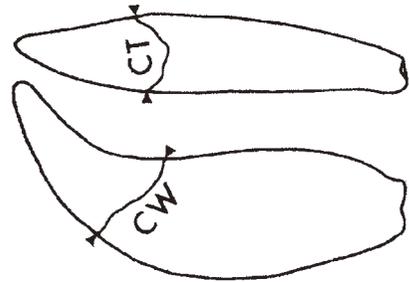


図4. 犬歯計測箇所: 歯頸部の横幅(CW)と縦幅(CT).

表2. 歯冠計測値(単位:mm).

歯種	左右	縦幅 (近遠心径)	横幅 (頬舌径)	
上顎歯	犬歯	左	20.6	16
		右	20.1	16.1
	第4前臼歯	左	17.3	12.9
		右	17.1	13
	第1後臼歯	左	24.1	19
		右	-	-
第2後臼歯	左	38.1	-	
	右	38.2	20.4	
下顎歯	犬歯	左	21.5	16.1
		右	21.5	16.2
	第4前臼歯	左	14.3	8.3
		右	14.3	8.3
	第1後臼歯	左	25.7	13
		右	25.6	13.1
	第2後臼歯	左	26.7	16.4
		右	26.6	16.2
	第3後臼歯	左	22.3	16
右		22.2	16.1	

査. 157pp. 千歳市教育委員会, 千歳.

- 門崎允昭. 1996. Dr.カドサキの実用鑑定野生動物痕跡学事典. 303pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 佐藤孝雄. 1993. “クマ送り”の系統-羅臼町オタフク岩洞窟におけるヒグマ儀礼の検討-. 国立歴史民俗博物館研究報告48:107-131.
- 佐藤孝雄. 2004. “シカ送り”と二つの時間「時空をこえた対話-三田の考古学-」. pp. 325-330. 六一書房, 東京.

- 佐藤直太郎. 1958. 釧路アイヌのイオマンデ. 110pp. 市立釧路図書館, 釧路.
- 梶田光明. 1982. 標津の竪穴V－昭和56年度標津町内遺跡分布調査事業報告書－. 32pp. 標津町教育委員会, 標津.
- 隅田まり. 1988. 浜藻琴神社遺跡のテフラ. 米村衛 (編), ナヨロの沢遺跡・浜藻琴神社遺跡－一般国道244号網走市北浜防災工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－. pp. 218-232. 網走市教育委員会, 網走.
- 豊原熙司. 1993. ウンメムケの穿孔位置について. 紋別市立郷土博物館報告6:23-34.
- 豊原熙司. 2004. ウンメムケの穿孔位置について (再考). 宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会 (編), アイヌ文化の成立:宇田川洋先生華甲記念論文集. pp. 527-551. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 西本豊弘・佐藤孝雄. 1991. オタフク岩洞窟遺跡出土の動物遺体. 羅臼町教育委員会 (編), オタフク岩遺跡 (第I地点・第II地点・洞窟). pp. 247-264. 羅臼町教育委員会, 羅臼.
- 山本文男. 1984. ノトロ岬－昭和58年度音別町ノトロ岬遺跡発掘調査報告書－. 音別町教育委員会, 音別.